

2019 年度卒業予定者アンケート結果報告書

2020 年 4 月 16 日

医学部 I R 室

1. はじめに

本学医学部では、学生が卒業時に修得すべき主要な能力を 5 つのコンピテンス（プロフェッショナルリズム、コミュニケーション、医学知識と科学的探究心、診療技能、地域社会へ貢献）として設定し、各コンピテンスにおける具体的な到達目標となる観察可能な能力であるコンピテンシーを 47 設定した（2019 年度の教科案内）。

医学教育分野別認証評価において、「学生と卒業生の実績の分析」を記載することが基本的水準のなかで求められている。従って、卒業生のコンピテンシー修得度を評価検討することは重要であり、2017 年度から継続的に 47 コンピテンシーの修得に対する自己評価の調査を実施している。その調査の中で、「十分に身についた」と回答した学生が学生全体の 35%未満（基準値未満）であったコンピテンシーは以下の通りであった。

- | | |
|-------------------|-----------------------------|
| I. プロフェッショナルリズム | 1/15(2017 年度)、0/15(2018 年度) |
| II. コミュニケーション | 1/6(2017 年度)、0/6(2018 年度) |
| III. 医学の知識と科学的探究心 | 6/10(2017 年度)、7/10(2018 年度) |
| IV. 診療技能 | 4/9 (2017 年度)、5/9(2018 年度) |
| V. 地域社会への貢献 | 6/7(2017 年度)、6/7(2018 年度) |

今回、2019 年度卒業予定者に対して、コンピテンス・コンピテンシー修得度自己評価を行い、2017 年度および 2018 年度の卒業生の結果と比較検討した。

2. 調査概要

2-1. 調査項目

本学の 47 コンピテンシーを「十分に身についた」、「身についた」、「身につかなかった」、「全く身につかなかった」の 4 段階にて学生の自己評価を行った。また、本学の教育全体に対する学生の満足度を「十分に満足した」、「満足した」、「満足しなかった」、「全く満足しなかった」の 4 段階にて評価を行った。さらに、将来に向けた本学教育に対する意見を求めた。

2-2. 調査対象

2020 年 3 月に本学医学部を卒業予定の 6 学年次 104 名を対象とした。

2-3. 調査方法

国家試験前のガイダンスの際（2020 年 2 月 5 日）にマークシート形式および自由記載で実施した。

2-4. 回答者数と回収率

卒業予定者 104 名中 104 名がアンケートに回答した。回収率は 100%であった。

3. 結果

愛知医科大学の教育全体を振り返っての満足度（A48）は、2019 年度においては「十分に満足した」が 53.1%、「満足した」が 45.8%、「満足しなかった」が 1.0%、「全く満足しなかった」が 0%であった。2017 年度の 35.7%、2018 年度の 38.3%に比べ、顕著に増加した。逆に「満足しなかった」と「全く満足しなかった」をあわせた割合は、2019 年度においては 1.0%であり、2017 年度の 5.1%、2018 年度の 12.7%と比較すると、減少傾向であった。

47 すべてのコンピテンシーの結果を別紙 1 に示す。2019 年度において、各コンピテンシーの中で、「十分に身についた」割合が 35%未満（基準値未満）のもの（下位 4 項目にあたる）は A22、A23、A31、A39 であった（別紙 1-1; 1-2; 1-3 赤枠および緑枠）。A22、A23、A31 は 2017 年度から 2019 年度にかけてすべての年度において基準値未満であった。また、A39 においては、2017 年度においては基準値未満であり 2018 年度においては基準値以上になったが、2019 年度において再び基準値未満となった。

A22.医学的発見の基礎となる科学的理論と方法論を説明できる。

A23.生体の正常な構造や機能、および発生、発達、加齢、死を生命科学的知識により説明できる。

A31.医学、医療における客観的根拠を適切に探索し、EBM を実践できる。

A39.プライマリ・ケア領域の救急対応ができる。

これらのコンピテンシーの数をコンピテンスごとにみると、2019 年度において「十分に身についた」と評価する学生の割合が 35%未満（基準値未満）であったものは以下の通りであった。

【2019 年度調査におけるコンピテンス基準値未満の割合】

I. プロフェッショナリズム	0% (0/15 コンピテンシー)
II. コミュニケーション	0% (0/6 コンピテンシー)
III. 医学の知識と科学的探究心	30.0% (3/10 コンピテンシー)
IV. 診療技能	11.1% (1/9 コンピテンシー)
V. 地域社会への貢献	0% (0/7 コンピテンシー)

2017 年度および 2018 年度においては以下の通りであり、過去 2 年間に比べ、基準値未満のコンピテンシーの割合は 2019 年度において減少しており、「V.地域社会への貢献」のコンピテンスにおいて顕著であった。

【2018 年度調査におけるコンピテンス基準値未満の割合】

I. プロフェッショナリズム	0% (0/15 コンピテンシー)
II. コミュニケーション	0% (0/6 コンピテンシー)
III. 医学の知識と科学的探究心	70.0% (7/10 コンピテンシー)
IV. 診療技能	55.6% (5/9 コンピテンシー)
V. 地域社会への貢献	85.7% (6/7 コンピテンシー)

【2017 年度調査におけるコンピテンス未修得率】

I. プロフェッショナリズム	6.7% (1/15 コンピテンシー)
II. コミュニケーション	16.7% (1/6 コンピテンシー)
III. 医学の知識と科学的探究心	60.0% (6/10 コンピテンシー)
IV. 診療技能	44.4% (4/9 コンピテンシー)
V. 地域社会への貢献	85.7% (6/7 コンピテンシー)

4. 考察

今回、昨年度と同様、卒業予定者を対象として、本学のコンピテンシーの修得度に対する自己評価および本学の医学教育に関する満足度を調査した。

本学の教育全体の満足度（A48）は、2019 年度においては、「十分に満足した」割合が 53.1%であり、2017 年度の 35.7%、2018 年度の 38.3%に比べ、顕著に増加した。逆に「満足しなかった」と「全く満足しなかった」をあわせた割合は、2019 年度においては 1.0%であり、2017 年度の 5.1%、2018 年度の 12.7%と比較すると、減少傾向であった。

5つのコンピテンスのうち、修得率の低いコンピテンシーの割合をみると、過去2年間において、「V.地域社会への貢献」が顕著であった。2017 年度および2018 年度においては、7のコンピテンシー中6（85.7%）と他のコンピテンスに比べ最も多かったが、2019 年度においては、基準値未満のコンピテンシーがなくなり、「V.地域社会への貢献」のすべてのコンピテンシーが基準値を超える結果であった。

I. プロフェッショナリズムについて

プロフェッショナリズムの項目で下位該当した「多職種連携」については、これまで多職種連携教育が全く行われていなかったが、2018 年度からプロフェッショナリズムの授業科目のなかで取り入れられた。具体的には、2018 年度においては、1・2・4 学年次の「プロフェッショナリズム 1, 2, 4」の科目において看護学部や薬学部とのアクティブ・ラーニング形式の講義が実施されており、2019 年度においても継続している。さらに、2020 年度においは、授業科目として IPE(多職種連携)がカリキュラムに加わっており、今後のコンピテンシー達成度の増加が期待できる。

II. コミュニケーションについて

2017年度において下位項目に該当した「ICTの活用」については、2018年度においては、「十分に身についた」割合が35%以上となり、2019年度においても、基準値以上ではあった。今後、Aidle-K（本学独自の moodle）のさらなる活用や医行為の経験ログでの eポートフォリオの活用により、今後、学生による ICT の活用は高まることが期待される。

III. 医学の知識と科学的探究心について

医学の知識と科学的探究心については、2017年度および2018年度に比べ、基準値未滿の割合は減少した。該当した3項目は、「22.医学的発見の基礎となる科学的理論と方法論を説明できる。」「23.生体の正常な構造や機能、および発生、発達、加齢、死を生命科学の知識により説明できる。」「31.医学、医療における客観的根拠を適切に探索し、EBMを実践できる。」であった。

2017年度から導入された新カリキュラムでは、社会医学・EBM・地域医療に関する講義および実習のコマ数が増加されており、今後これらに関係したコンピテンシーの達成度の向上が期待される。しかし、最後の旧カリキュラムを履修者は2021年度に卒業予定であり、旧カリキュラム履修者においてもコンピテンシーの修得を念頭に置いた教育を行うよう促す必要があると考えられる。

IV. 診療技能について

診療技能については、「39.プライマリ・ケア領域の救急対応ができる。」の項目が、基準値未滿として該当した。身体診察と基本的臨床手技においては、クリニカル・クラークシップを順次増加させている。具体的には、2017年度の卒業生では51週、2018年度卒業生では61週、2019年度の卒業生は68週としている。さらに、2020年度の卒業生では、72週にまで増加させる予定であり、身体診察と基本的臨床手技に関しては、コンピテンシー修得度も向上することが期待される。さらに、各診療科におけるプログラムの改善により、今後、コンピテンシーの習得度を上昇させていくことが望まれる。

V. 地域社会への貢献について

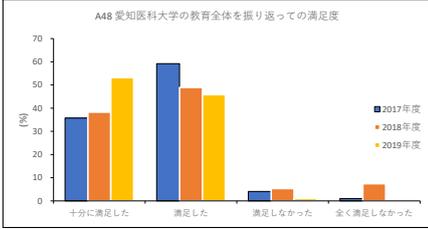
地域社会への貢献については、2017年度および2018年度においては、基準値未滿のコンピテンシーは85.7%と最も高かったが、2019年度においては、基準値未滿のコンピテンシーがゼロとなった。この背景として、順次拡充してきたカリキュラム改革によるものであると評価できる。具体的には、2017年度のカリキュラム履修者は、低学年次から地域社会と関連した講義（「地域社会医学実習」、「社会医学実習」、「地域包括ケア実習」、「地域医療総合医学」、「地域医療早期体験実習」、「クリニカル・クラークシップ1（地域医療）[必修]」、「クリニカル・クラークシップ2（地域医療）[地域枠学生は必修、他学生

は選択]」)を履修している。地域社会を見据えた医学教育は、これからの超高齢化社会で医療を実践していく上で最も重要であり、地域包括ケアを年頭においた教育を充実させることは重要である。

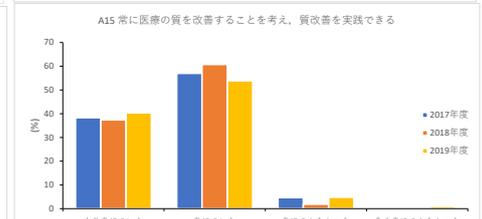
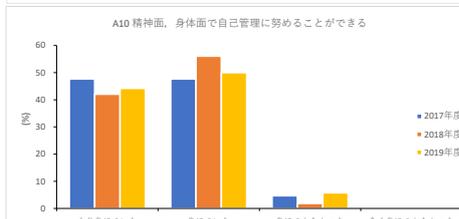
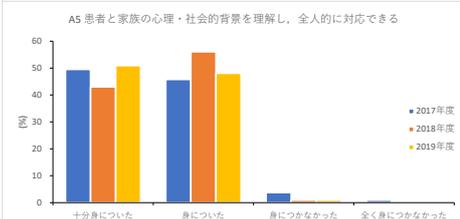
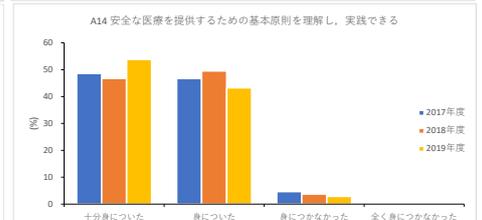
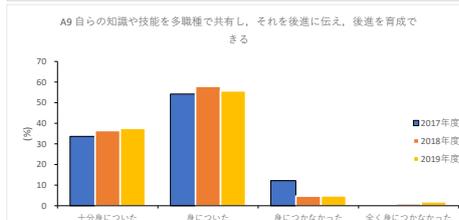
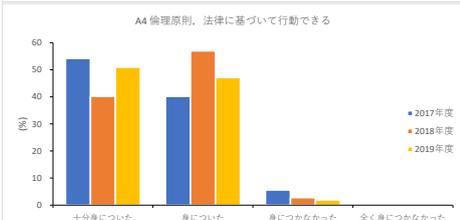
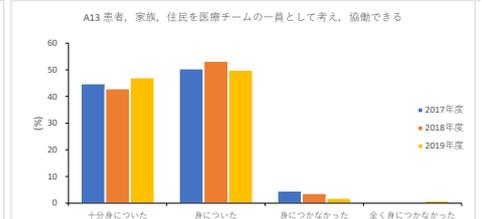
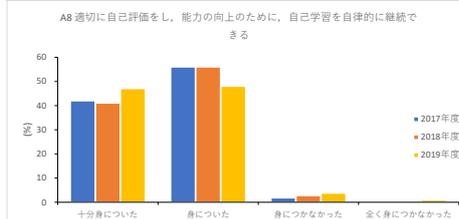
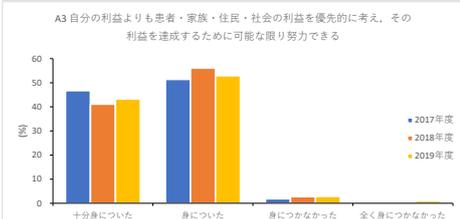
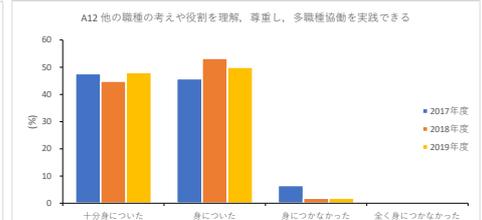
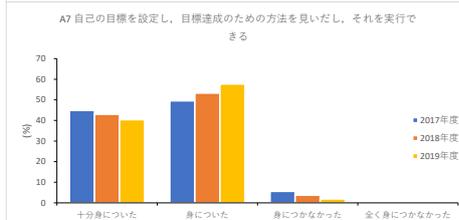
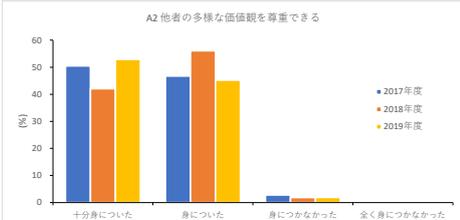
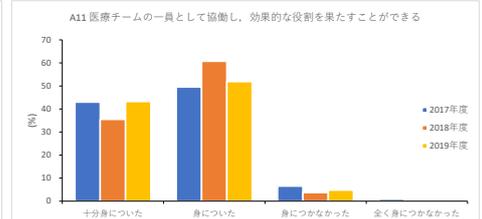
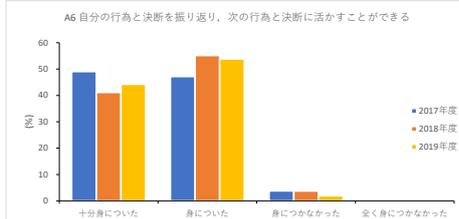
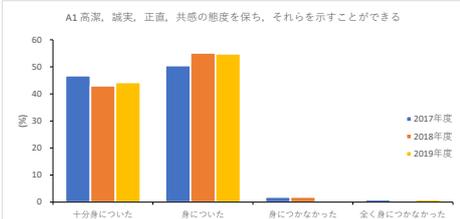
5. 最後に

2017年度から継続して実施したコンピテンシーの修得度の自己評価と本学の教育全体に対する学生の満足度も今年度で3回目となった。過去2年間と比較して、卒業時コンピテンシーの達成度も上昇していることから、カリキュラムを充実させてきた結果と評価できる。新カリキュラム履修者の2017年度の入学生が卒業する2022年度までの経年変化を継続して検討することで、現行のカリキュラム評価を行う必要があると考える。

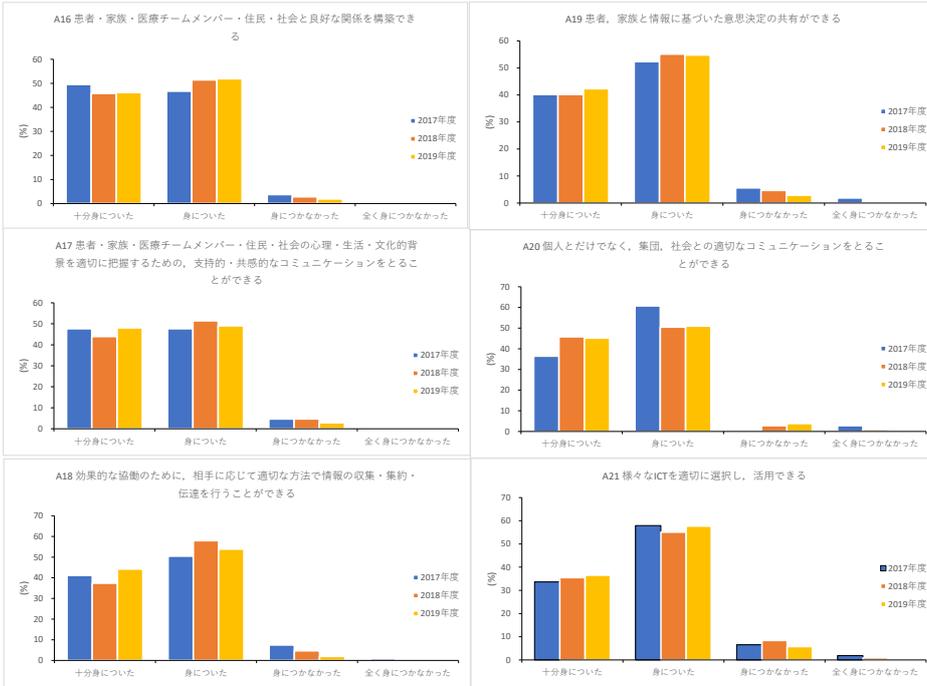
満足度



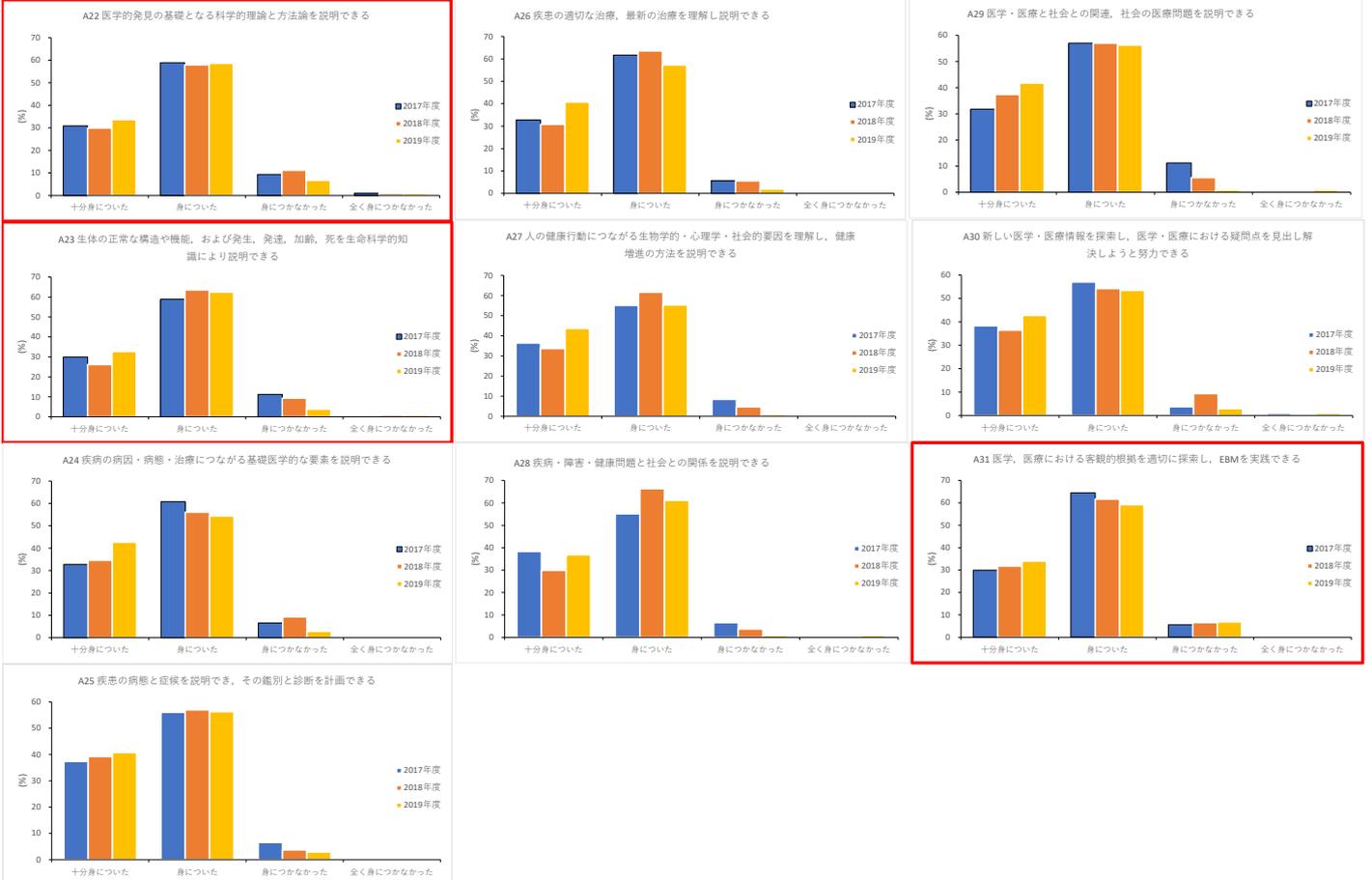
I. プロフェッショナリズム



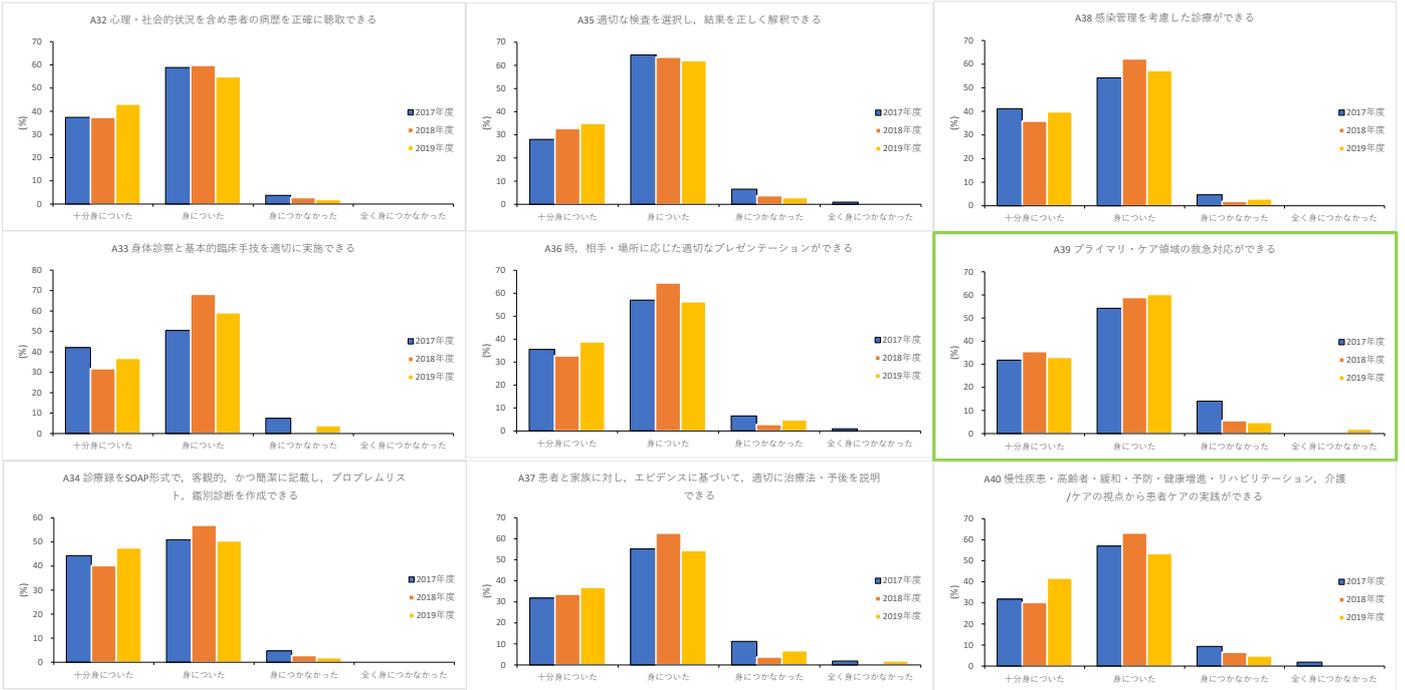
II. コミュニケーション



III. 医学の知識と科学的探究心



IV.診察技能



V.地域社会への貢献

